

難所・野麦峠

12月に入ったころの季節に野麦峠を通った。長野県松本市より岐阜県高山市に向かって行ったが、山の中に入れば入るほど今まで雪が全くなかった風景から、一変して雪国に迷い込んだように思えた。道路脇には雪が積み上げられ、更に山奥に進むにつれて対抗する車もなくなり、不安な気持ちは抑えられなかった。無地目的地高山に着けるのだろうか。そこへ雪が降ってきた。

その昔、野麦峠は能登で取れたブリを飛騨経由して信州に運ばれていた。能登でブリ1尾が米1斗(15kg)であるものが、野麦峠を超えると4倍の米1俵(60kg)にもなった。

「あゝ野麦峠」山本茂美のノンフィクション文学。副題は「ある製糸工女哀史」で1968(昭和43)年の発表。これは戦前に飛騨地方の農家の娘(多くは10代の少女)が野麦峠を超えて長野県の諏訪、岡谷の製糸工場へ働きに出た。吹雪の中を危険な峠雪道を超え、また劣悪な環境の下で命を削りながら当時の主力輸出産業であった生糸の生産を支えた女子工員たちの姿が描かれている。

峠沿いには梓川、大正池、河童橋等で有名な上高地。山峡の秘湯・白骨温泉は1軒全てが自家源泉の白濁湯。峠を越えて下り坂になると陽が照ってきた。高山の町が眼下に見える。何故かその時命拾いをしたような安堵感を覚えた。あゝ野麦峠よ！

撮影 2010年冬

